

草目

2015.8.30

第3種郵便物認可

# 館山軍政 少年が見た占領

# 戰後70年

上

隊の作戦を円滑に進める先遣隊として、米第4海兵連隊が富津、館山に上陸した。

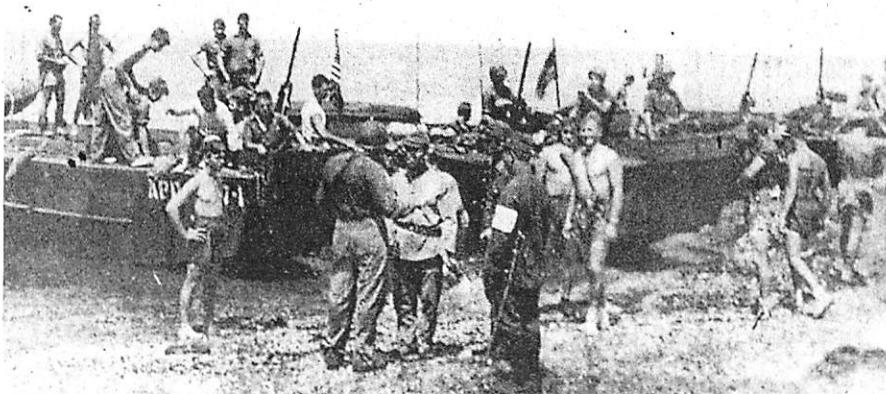
は米兵の姿に目を奪われた。上半身は裸。「緑色っぽいショートパンツを履き、肩からピストルを提げていた」。室内に居合わせ

た数人からも「なんだ、敵地に上陸するのに裸なんて」「日本なら考えられない」の声が上がった。家から岸壁まで300余㍍。遮るものはない。よく目渡せた。

945年8月28日の上陸用舟艇の写真を探し出した。高橋は「これだ」と声を上げて喜んだ。富津沖の人工島の要塞（海堡）に着いた上陸用舟艇の写真だつた。

館山は沖縄以外で唯一、敗戦の直後に米軍が軍政を敷いた占領地区とされる。軍政は住民の目にどう写ったのか。証言と資料で70年前を振り返る。

「来たぞ！」。室内から  
一斉に声が上がった。館山  
港を見下ろすと、先遣隊の  
上陸用舟艇が岸壁に近づいて  
きた。元館山市教育長の  
高橋博夫(87)は「たしかに  
隻だった」と記憶をたど



米軍の史料を見る高橋博夫  
(左)と利涉弘章=館山市沼



高橋は数年前から、上陸はいつで、あの米兵はどんな人たちだつたのか、と考えるようになつた。自ら自擊したが、裏付けのものは何もない。家から一緒に下ろした終戦連絡委の人たちに知る顔もなかつた。

眞舌もなく、この田舎に詰めていた終戦連絡委の手々は屋間のうちに引き上げた。高橋は他の家々のよろこびに雨戸を閉め、家にこもった。た。「鬼畜と教えられてきた米兵が、どんな荒くれ者なのか分からず、不安だつた」

ていると、沖に止まつた輸送船から隊列を組んだ上陸用舟艇が数隻近づき、急に方向を変えてコンクリートの滑りに乗り上げた。

先遣隊は上陸すると、山海軍航空隊（現・海上衛隊第21航空群）の基地に入った。そこから車両でちこち走り回る様子は見きしたが、高橋が先遣隊米兵と顔を合わせる機会、なかつた。

た。  
米軍はこの日すでに、本  
隊の安全な航行のために東  
京湾内の危険物を除去する  
作業に入っていた。

この日、連合国軍最高司令官マッカーサーが厚木飛行場に到着し、米軍が主力の連合国軍は日本各地に進駐を始めた。千葉県には本

1945年8月28日、富津岬に上陸した米海兵連隊。高橋博夫が見た海兵連隊と特徴が似ているという(米海軍歴史センター提供)

幼友達で元航空自衛隊幹部学校長の利渉弘章(77)が答えを見つけた。米海軍の史料をネットで調べ、1

本隊の主力はガニンガム  
司令官（准将）率いる米陸  
軍第112騎兵連隊で、將  
兵約3140人だった（千  
葉県警察史 第二卷）によ  
る）。 （敬称略）  
(田中洋一)

高橋は数年前から、上陸はいつで、あの米兵はどうな人たちだったのか、と考えるようになつた。自ら日本に付いたが、裏付けるものはない。家から一緒に下ろした終戦連絡委の人たちに知る顔もなかつた。

の基地につながり、今も残る。基地には大きなテントが幾張よりも設営され、大勢の将兵を養う食糧も積み降ろしたようだ。

幼友達で元航空自衛隊幹部学校長の利渉弘章(77)が答えを見つけた。米海軍の史料をネットで調べ、1

本隊の主力はガニンガム司令官（准将）率いる米陸軍第112騎兵連隊で、將兵約3140人だった（千葉県警察史 第二卷）による）。（田中洋一（敬称略）

朝日 2015.8.31

# 封鎖解け進んだ交流

## 山軍政少年が見た占領

戦後70年

下

文書には、連隊に軍政参謀課を設置▽裁判所・金融・警察権など幅広い民事を掌握▽学校・酒場・劇場などを閉鎖▽午後7時~午前6時の外出禁止などが書かれていた(外務省の公文書より)。

歩哨は制服で鉄兜姿、肩施設を回った。安房高等女

兵は占領地区の様々なから銃を提げていた。「だが、威圧感はなかった」と高橋は振り返る。歩哨と目が合うと、「日本軍なら6『おいこり、家に入っている』と叱られそうな場面でも、親近感さえ覚えた」。

米兵は交差点に機関砲を立ち入り禁止になった。「ぐるぐると巻く鉄条網を初めて見た」。封鎖された先に館山航空隊が広がる。米軍は交差点に機関砲を置いた。歩哨が詰め、ひと休みする歩哨舎も置かれた。

NPO法人安房文化遺産フォーラムの愛沢伸雄代表が米テキサス軍事博物館から得た記録によると、米陸軍第112騎兵連隊のカニガム司令官は3日朝、館山終戦連絡委員会の林安委員長らを米艦に乗せ、文書「米軍による館山湾地区の占領」を手渡した。

1945年9月3日、米軍本隊上陸の直後、高橋博夫(87)の家の前の県道交差点は鉄条網で封鎖され、立ち入り禁止になった。



上 高橋博夫が両手を広げた県道交差点に鉄条網が設置された。そこから西(左)側は立ち入り禁止。館山港が奥に見える。下 館山病院で英会話教室に携わった米兵講師2人(前列左から2、3人目)と穂坂與明院長(同左端)。1945年11月、館山病院提供

学校(安房南高校を最後に安房高校と統合)には9月2日に将兵6人が訪れた、と同校の記録に残る。

「考えられる理由はある」と高橋の妻澄子(85)は言う。終戦時は安房高女3年生。当時、工場になった学校ではジュラルミンを削つて何かの部品を造っていた。日本海軍の兵隊が中庭に駐屯し、高女生は病院で看護実習を受けて戦場になれば臨時野戦病院にする計

画も伝えられていた。

3日の文書に基づく封鎖や禁止令は数日後、学校、集会、夜間外出……とほぼ一斉に緩和されたはずだが、裏付ける文書は見つかっていない。英語の公用語化などの軍政を準備していだ連合国軍最高司令部が、日本側に交付する予定の布告を3日朝、当時の重光葵外相らの説得で撤回した事

情と関係ありそうだ。

重光は著書「昭和の動乱下」(中央公論社刊)で書いている。「総司令官は……軍政の施行を中止することを承諾」「館山地区は……やや混亂を見たが、軍政は後に至って取消された。……軍政見合わせの命令伝達が間に合わなかつた」

安房中学は7日、安房高女は10日に登校が再開された。高橋の家の前の鉄条網は撤去され、県道の封鎖も解かれた。

高橋は助教諭を務める西岬村立東国民学校(当時)に再び通り出した。女性教師と自転車をこいで行くと、銃を提げたMP(憲兵)に呼び止められた。英語で尋問された。「どこへ

その秋には、日本文化に关心を持つ米士官2人を自宅に招き、茶を振る舞つた。館山病院で始まった米兵講師による英会話教室にも出席した。米将兵への親しみはいつそう増した。

だ。身ぶり手ぶりを交えて「スクール(学校)、ティーチャー(教員)」と答えると、通行を許された。その春安房中学を5年で卒業した高橋は、3年までや禁止令は数日後、学校、英語の授業を受けていた。「窮すれば通ず、だ」鬼畜と教えられてきた米兵と接し、「怖いと思ったことは一度もない」と高橋は言う。それどころか、交流したいとさえ望んだ。

兵士は黒板に名前を書いた。出身地は「テキサス」。だが世界地図でテキサスの位置を示せなかつた。親しみやすい人柄だったが、これには驚いた。英単語のづりが分からず、高橋に尋ねたこともある。

(敬称略)